

1987. 1. 25

1987. 1. 25



『むくげ通信』百号

巻頭言

むくげの会

『むくげ通信』がまだ五〇号くらいの頃は、本当に一〇〇号まで続くんだろうかと半信半疑であった。実際、編集後記に一〇〇号まで頑張りますと書いた人もあつたようだ。自信はないが、やる気だけはあつた。

二カ月に一回だから、年間六回発行。一〇〇号には一七年半かかることになる。ただ、初期の頃は発行が変則的だったから、実際にはまる一六年だ。

初期の通信は、集まる場所と日程を知らせるだけの簡単な事務連絡だけであった。一九七一年の三月、三・一運動を記念した集会を主催し、姜在彦先生に講演をしていただいたことがあるが、その報告も、一枚きりだけの通信であつた。それが四号である。今の発行体制、ページ数になつたのは、一四号くらいからであろうか。

印刷機は、当初はお金を出し合つて買ったものだ。それまで借りて使つていた手動式の機械の調子がおかしくなり、一応自動式を買つた。もちろんガリ版用で、今のような進歩した機械ではない。これは、かなり酷使したのち御用済みとなり、引取り手がないので粗大ごみとなつてしまつた。

いざれにせよ、神戸学生青年センターは、むくげの会が活動を続けていくにあたり、非常に大きな存在であつたといえる。あらためてセンターに感謝したい。

通信は、各自が分担した原稿を書き、それをそのまま印刷できる状態に清書することが原則になっている。ガリ切りの時代だつたら、ガリ切りまで各自がするわけだ。

この手づくり通信については、以前から、手書きの方が味があつていいと言う人もあるれば、活字にした方がいいという人があつたりで、評価は分かれている。現在むくげの会としては、手書きであることを原則に、ワープロなどを使って読みやすいようにくふうするのは各自の自由という形にしている。ただ、個性的で読みにくい字を書く人に限つてワープロではないといつた「矛盾」もみられるようだが。

通信は、メインとなる論文をはじめノレ（歌）や権域など、各々の項目に分かれている。論文は、むくげの会で研究発表したもののが主となるが、それ以外は通信作成のために各自が調べる形になる。

通信をここまで続けることが出来たのは、もちろん会員各自の意識、熱意、それにチームワークが固かつたからであろうが、経済的自立、場所の確保といった側面も、決して無視できない。むくげの会が発足した当初は、連絡先は個人宅で、活動の場は主として労働会館であった。この労働会館の場所を確保するのがひと苦勞で、六時までに誰かが行つて部屋の予約あるいは使用料の支払をしなければならなかつた。みんな若かつたからできたが、今ではとても出来ないことである。

通信の発行は、三宮のベ平連・神戸の事務所でやつていた。もともとむくげの会の前身は、ベ平連の別組織として出来たものであつた。つまり、ベ平連というものは行動のための組織である。しかし、部落問題や朝鮮問題に関わろうすれば、ある程度の知識が必要になつてくる。そこで学習会のための組織「差別・抑圧研究会」をつくつたが、これがむくげの会に発展解消したわけだ。

こうしたいきさつから、三宮のベ平連の事務所を間借りしていたのだが、この事務所はいすれなくなるだろうから、その後はどうしようかという不安はあつた。そこで自力で事務所を確保するために、基金を集め始めた。お金に余裕のある人は出来るだけ多くという原則だつたから、毎月一万円ずつ払つた人もあつた。一〇年以上前の一万円である。この基金のおかげで、現在、出版活動が支障なくできるのである。ちなみに、現在の会費は月五千円。少し高いのは、従来からの伝統である。

通信発行、および会の集まりの場所の問題を一挙に解決したのは、神戸学生青年センターであった。阪急六甲の駅に近く、

こうしたパターンが確立したのは一〇号くらいから。できるだけ編集の労力を少なくしようとの意図からだが、おかげで編集はずいぶん楽である。論文はローテーションを決めて持回りで、後は各自が好きな項目を選んで書く。昔は、朝鮮に関する書籍が少なかつたから、どんな項目でも書きやすかつたが、最近はいろいろな朝鮮関係の本が出回るようになつたのと、すでに通信で紹介したものが多くなつた関係で、書くネタ探しに苦労するようになつてゐるのが現状である。

『むくげ通信』の原則は、あくまで会の活動を続けて行くためのものであるということだ。そのためには会員各自が無理なく書けるものでなければならぬ。だから通信は、会員各自の活動ないしは知的興味が反映したものになるのは当然だ。

最初のうちは、それでも問題はなかつたが、研究が進んでそれが専門家集団に近くなつてくると、内容がむずかし過ぎるのではないかという問題が起つてきた。これは、通信発行の赤字も絡まる問題で、赤字を解消しようとすれば読者を拡大しなければならず、読者を増やそうとすれば内容が問題になるという構図だ。

これについては、いろいろ話し合つた結果、先に述べたような原則から、ある程度難しくなるのは仕方がないという結論に落ち着いている。ただ、各自が難しい内容でもできるだけ読者を意識し、分かりやすく書くよう努力することは確認されてい。それが現実的になつてゐるかどうかは別問題だが。

いよいよ百号が現実的になつた今、次に目指すのは二百号である。ただ、二百号なんて今のところは半信半疑である。